

感染症動向調査からみた島根県に おける細菌性髄膜炎

いずみ 泉 のぶ 信 お 夫

キーワード：島根県感染症動向調査，細菌性髄膜炎，b型インフルエンザ菌，肺炎球菌，蛋白キャリア結合ワクチン

要 旨

島根県の感染症発生動向調査では1999~2010年の間の細菌性髄膜炎の報告は54件あり，15歳未満30件（5歳未満25件），60歳以上は少なくとも10件あった。5歳未満の人口10万当たり6.1件になるが，報告漏れも示唆された。検査室よりの髄液からの検出菌の報告の集計はインフルエンザ菌（Hi）19件，肺炎球菌（Sp）20件，GBSと大腸菌が20件あった。最近の小児の細菌性髄膜炎の起因菌はHi約60%，Sp約20~30%，5歳未満の人口10万人当たりの発症数はHi 5.5~11.7，Sp 1.2~2.6とされる。日本ではHi髄膜炎は1985年頃より漸増し，最近，耐性菌と歩調を合わせての急増の指摘もあるが，米国ではワクチンで他の侵襲性疾患も含め0.3にまで劇的に低下させた。ワクチンのルーチン接種化とともに，血清型等も含めた全数サーベイランスの確立が望まれる。

はじめに

細菌性髄膜炎は最重症の細菌感染症である。特に罹患率が高い乳幼児の第1位の起因菌のインフルエンザ菌（Hi。大多数がb型，Hib）と第2位の肺炎球菌（Sp）には乳幼児用の蛋白キャリア結合ワクチンがあり（vaccine preventable disease, VPD），前者は1990年代より，後者も2000年頃より多くの国々で使用されてきた^{1,2,3,4,5}。

日本も最近やっと使用可能となったが（Hib 2008年12月，7価Sp 2010年2月），日本独特の定期接種と任意接種の篩い分けで後者になり，低い接種率（Hib ワクチンは2010年1月時点で~10%）に止まっている⁶。

死亡や後遺症の重大事に関わるHib，Sp両ワクチンの現状は，他の先進国とのワクチン行政の遅れ（ワクチンギャップ）の代表格である。色々な理由があるが，一つに日本は欧米に比べ細菌性髄膜炎の罹患率が比較的に小さく，サーベイランスが不十分で認識も小さかったことがあげられる。

しかし，両ワクチンが高接種率の国々での本症

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科
連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613